

故粒木つね子の君を悼む

中 村 た ま

私共文科三年のものが、始めてこゝに入學いたしました時は、四十名もございましたのに、只今は其の四分の一を減じまして三十名になつてしまひました。しかし、粒木さんを除いてはどなたも種々の理由で退學なさつたので、私共が生きて居る間は、またあはれるといふあかるい望みのある方々許りでございますが、粒木さんはこの地球上のあらゆる所をさがしもどめても、とてもあへるといふ望みないおもくるしい悲しみと痛みとを残して永久にかへらぬ人となつてしまひました。しかし私はまだ粒木さんがなくなつてしまはれたとは思はれません。けれども、粒木さんはなくなりました。そして只今追弔會をいたして居るのでございます。先月の三日にあんなに苦しんで苦しみぬいた友は、臨終は如何にも安らかに誰も知らない中に段々と眠つてゆきました。「行かう／＼」と浮言を力ない聲で言ひ續けて、體温は次第にさがつてゆきましたそれでもまだ死ぬ等とは思つてゐませんでした。私共が夕の食事をいたして居ります中に、もう氣は段々遠くなり、時々ちつとみ開いた眼も閉ぢたまゝになつてしまひました。最後の注射は唯脈を機械的にうたせるにすぎませんでした。「もうだめでござります」といふ最後の醫者のしんみりした言葉の響くまでは、そこに人氣のない程静かな神聖な崇高な氣分が漂よつてゐました。息をこらして死んでゆく友の姿を、誰も／＼人間にはめつたにあらはれない眞の眼でちつとみつめて居りました。この静かな中に絶えずあはれな年よられざいました。

たお母さんのおろ／＼したしかし信仰強い讀經の聲がきこえました。醫者の最後の言葉にお弟さんは聲をたてゝなきました。お兄さんは「おつね、お前はどう／＼親に先だつてしまつたな。これも先の世の因縁だ。今度生れかはつたら孝行しなさい。」と言つて居られました。「おつね姉さん／＼」と「もう聞えませんから」と醫者から注意せられるまで呼び續けて泣いてゐられたお姉さんは、急に物でも忘れた様にぼんやりとお姉さんのそばにたつて居りました。お年を召したお母さんの姿がほんとに堪へられないほどあはれで苦しうございました。

こゝに入りました年の二月兄を失ひました私は、御兩親様や皆様の御心の中を想ひまして、何とも言へない苦しみをおぼえました。粒木さんはそんなお弱い方ではありませんでした。女學校時代體重が多いと言つて笑はれる程健全だつたと申します。一年の時の寫真を見ましてもこんなだつたらうかと驚くほど肥えて居られました。去年の二學期始めはかなり元氣でした。所が十月頃からなんとなしに身體がよくないと言つてました。食事が進まぬと言つてよく斷食したといふ事をききました。私も滋養分をとる様にすゝめましたが卵子もきらひ、牛乳も戴けないと言ひ／＼して衰弱は次第にたゞさへ弱つてゐる身體を犯しつゝあつたのでござります。なんだかお顔の色が勝れぬ／＼と心配しつゝも、教室のみであふ位で時折注意するにすぎませんでした。十一月頃から日比谷の胃腸病院に行つたり順天堂に行くのを見かけました。そして勝れぬ身體を例の忍耐強い粒木さんはおして出席なさいました。體操もいたしました。ほんとに苦しい様子さへ人には見せませんでしたが、もう十一月も末頃一日欠席なすつたので御見舞ひにゆきますと思つたより重い病氣に驚かすにはゐられませんでした。あの軽い滋養煎餅さへ喉を通らないのでございました。「順天堂では食道炎

だといふし、日比谷の胃腸病院ではわからないと言ひながらとにかく食べられるだけ食べる様になんでもよいからといつてみたり食べてはいけないと禁したり何がなんだかわからない」と寂しく笑つて居りました。その夜御飯の時もほんとに苦しそうでおひやを飲むにも喉を通る時の苦しそうな様はどうしても普通とは思はれませんでした。「どうも三年はよく死にますね。磯村さんも先月の今日なくなつた。私はあの方こそありつけの精力を費しきつた人だと思ふ。」これからそれへと話してゆきました。話す時は、入院してからもつとめて元氣になさいました。そして「私はさくよりも話す方が疲れない」等と言つて、「私は此頃ほんとに死の苦しみといふものを味つた様な氣がする呻いて／＼室の人達に迷惑かけてゐるけれど」とまはりをみて寂しく笑ひました。私はぞつとしました。まさかとは思ひながらも、心は不安で／＼でたまりませんでした。「私が死ぬとあの時あゝ言つた、かういつたと言ふだらうね」と言はれた言葉もやつぱり虫が知らせた事でもいふのでございませう。「人は自分の死を悟る等といふけれどしかに生理上から一つの暗示をうけて自然に自覺するのだらう」等といつて居りました。何一つでも氣になることばかりなので私はおうちへ知らせる様にすゝめましたが、心配かけるだけで仕方がないからと言つて居りましたが、早く手當をするのが大切だからと言つて通知なさる様にくれ／＼もすゝめて、その時如何にもなつかしそうにまだいゝでせうまでせうと漢文の試験のある事を知りながらもそして心配しながらごめました。私は妙に心が亂れて暗い思ひに沈みました。まもなくお兄さんが商用にかこつけて心配して来られすぐ佐々木病院に入院されたのでございます。その後お兄さんとお姉さんとお代りになり看護婦もつきつきりでした。胃潰瘍と診断された時、夏目さんの死から神經をおこさないだらうかと心配してゐましたが、本人はかへつて病名のはつきりし

たことをよろこんで、もうこれからよくなるばかりだからと言つてました。しかし決して安心の出来る容態ではないと思ひました。僅かにあまり好まないおもゆを五勺位と卵子を漸う一個位しか戴かないし、X光線をかける時は三日も絶食の様な事もありまして見舞に來られた時は元氣に話もいたしましたが「苦しい、どこか苦しい」と言つて居るのが常でございました。時々は胸がわるいといつてお藥も喉を通りませんし見てゐられないほどな苦しみで食事をしたりお藥を飲んだりするのでござりますから、まあいつなほるだらうとほんとに氣が氣でありませんでした。それでもだん／＼よくなるといつて、去年の暮の二十八日には昨日からおかゆになつたからといつて、それは／＼嬉しそうにしてお正月には歸られるだらうと言つて居りました。お姉さん本人よりも嬉しそうにお醫者も命にかゝはる事はないから、そして経過もいゝしと言はれたと言つて輝いた眼で私を玄關まで送つて下さりながら申しましたので、私もすつかり安心して氣もわく／＼しながら歸りました。粒木さんはいつもこんなことを申して居りました。「お醫者は學校から來た様になつてゐるので私をそれは特別によく見てくれます。いつなほるでせうと始終聞くものだからそんな性急なことを言つても仕方がない。なほる時にはなほるのだからつて腰かけて懇々と説いてゆくのですよ」と微笑してゐました。「話す時にあんまり元氣なので見舞人のいつたあと痛い苦しいと呻いたりいつまでになほるだらうその日がわかつてゐれば我慢もしやうがこんな苦しみをいつまでも續けては堪へられないと言つたりしてお醫者を苦しめるので醫者は神經質だときめてかゝつてゐる」と言はれた事もありました。實際苦しかつたのでございません。そして人が見えるとそれをおくびにも見せないでつとめて元氣に話すのでした。なつかしげに見舞人を迎へました。誰もが親切にして下さる忘れてゐるだらうと思つた級の人達もよくきて下さると言つ

て喜んで居りました。廿八日に安心した私はその一日おいて卅日夜急性腹膜炎併發で危篤ときいてどうも信じられませんでした。信したくございませんでした。卅一日の朝私は粒木さんを見て驚きました。一晩の中に顔色は土のやうに甚しい衰弱をみせて、前よりももつとく苦しそうな呻きをたてゝ居りました。三度の食鹽注射は粒木さんにはかない春を迎へさせました。元日の朝お兄さんとお妹さんが來られました。お妹さんは「死ぬんだらうか私は死なしたくない死なしたくない」と言つて、たまらなさうに顔を蔽ふて廊下をあちこちと歩いては泣いてばかり居りました。お兄さんは流石に苦痛をしのんで醫師に最良手段を請ひましたが、もう手のつけ様がないまでに衰弱しきつてゐるのでといふばかりであります／＼落膽させました。病人は痛い痛いときいてはるられない悲痛な叫を續けて居りました。どうせ死ぬならばあんなに苦痛をさせないでどうにかならないだらうかと思はせるほど胸の痛く苦しく悲しく感じました。静かな病院でしかもお正月の長閑さがこれにも幾分漂ようてゐるその空氣を貫いてきたるやうな最後の苦痛を訴へるしぶる様な聲が響きわたるのでござります。「先生々々」とお醫者を呼んでは「注射をしてくれ／＼」と今の苦しみをのがれたい許りに幾本もの注射を痛く感する迄してくれとせがみました。卅一日夜少し静かになりました時、お姉さんにお經をよんでもくれと言つたそうでござります、知らないからと言つて看護婦さんが讃美歌を歌つてあげませうと言ひながら「山路越えて」をうたひ出しました。粒木さんはぢつとき／＼入つて居りましたが、もう一つと言つてまた繰りかへさせてきてゐたといふ事でござります。唯なにとなく死を悟つたのではないでせうか粒木さんの心が察せられて、悲しさを通りこして崇高な氣がいたしました。三日目にはもう體温もさがり脈も少なくなつて全く苦痛を訴へる力さへなくなつた様に思はれました。おひやをのみたがつてそれでも飲ませますと下痢し期になりました。

て苦しみますのでやりませんとおひやおひやと言つて訴へて居りました。二日の夜お兄さんがおひやをあげたら手を合せて喜んだと言つてあゝあんなことなら、ぞん分喜ばせてやりたかつた、と言つて男泣きに泣いてゐられました。三日の朝お母さんがお見えになりました。助けをからねば歩かれぬお姿みてほんとにお母さんを落膽させ申したくない、たすけてあげたい、と切に／＼感じました。お母さん死ないよお母さん死ないよ。私はこんなことじやあ死ないよ」と、まあ何べん繰りかへした事でせう。ふと死ぬ／＼と言ひだしかんなじやあ死ぬかもしけぬと思ひ入つた様にしんみりあたりをみまはしたりしました。お姉さんの頸に両手をまきつけて「かうして起してみてくれ」とさん／＼困らせました。そしてもう痛いといふ言葉も盛んに燃えつくした残りの焰の様に時折「痛い／＼」と言つたり、「行かう／＼」といつたりしてどう／＼二十五歳を一期になりました。

私はせめても今日のこの會に粒木さんその人について眞面目に考へてみたいと存じます。いつでしたか粒木さんはかう申したことがありました。「いつも／＼追弔會は形式にはまつた通り一遍のものばかりだ。私はせればもつとよくその人を言ひあらはすだらう」と、あゝ言はうと申された粒木さんは言はれる人になりました。そして只今強い印象をのこしてゆかれた粒木さんを追憶してその人を申上けて見たいと存じますが、普通一般の人物批評にさへ私のやうなものにはなか／＼困難でございますのに奥行の知れないそれだけ深みのある人かわからぬ粒木さんを殊に私に對しては「もしあなたに私全部を見せたら驚いてわからなくなるだらう」といつて遂にうちあけませんでしたので尙更はつきりしては居りません。しかし私はあの方にあ

へばあふ程、話をきけばさくほど尊敬の念が厚くなりました。ごといてあげられないのですがいつの時でも粒木さんのお話には實がありました。傾聽して居りました。粒木さんには私を導く強いあるものがありましたが、私はあれほど出来た人をみたことがありませんでした。それでも始終御自分では物足りなくて／＼不足感的な人ですのに理性がかつてゐました。意志が強うございましたので大方の人々には感情的なといふ點は見出されなかつたらうと思ひます。沈静な態度でしかし温い同情をもつた眼で周囲をながめて居りましたそしてたしかに超然とした風がありました。特に一年の頃に。しかし所謂超然たる風ではありませんあらゆる周囲の世界に非常に鋭い批評眼をもつて冥想的獨創的な頭で精細に確かに少しももらさない觀察力をもつて居りました。正しい見識をもつてゐました。實際粒木さんは圓熟しきつた人でした。知に於てもまた情や意に於てもそして文學は勿論繪畫に對する才能や植物に美味をもつてゐる事や普通一般の道徳觀やあらゆる方面に熟達してゐました。それにもあき足らないでつまり普通のレベルをいつもぬけだして人より一步先に一步先にと出て居り、更に足らぬ／＼と悶えながら努力する人でした。いつかこんなことを申しました「私はいつも數歩同じ仲間をぬけだして先に進んでゐるのに人は追ひかけては導かうとしてゐる」と、そしてそれは既に女學校時代の最初、小學校の終り頃からの心の狀態らしいのでございます。そこに他のなれたばかり知れないあるものがありました。それが積り積つてもう他と比較の出來ない私共では推量することの出来ないある深みをもつてゐたのでございます。それは決して當時の粒木さんに對して幸福なものではありますませんでした。人がよく見えすぎたり自分の行爲が一々はつきりしすぎたりして不満煩悶するのでございました。

た。そしてどんな場合にも自分を第三者において客観的に眺めてゐる事でした。それがいやだ／＼と言はれた事もあります。かうした一方にまた諧謔の分子もありました。たはいもないことをほんとにおもしろくいたしたものでございます。発表の巧な口ぶりでさして面白くない事でも面白くさせました。沈黙の人ですのに時々かうした座談をして喜んでゐました。又粒木さんは情の人でした。特に妹思ひで稀にみる行届いた好い姉さんでした。四十一年の十六日の日誌に今日はうれしきもの三つありたり。といふを冒頭に、

一つはくま子の作文學校にてよみあげられし事なり。この事實に我が事よりもうれしかりしは新しき希望を得ればなり。そは我が兄弟の皆文に巧みなる名を學校にのこすを得ることを思へばなり。姉君は言ふまでもなし。我も不肖ながらいさゝか我が級の人よりは秀れたる事人にも認められたり。如何にもしてくま子もと夢の中にも希ひ居りし處なれどそは到底せんなき事と思ひあきらめ居りしなり。そはくま子の文は我平生より深く信じ又敬服し居る所なるがそは我のみ。かの正直にして少しも飾りなく銳くして往々人の虛を突き機を穿ちしかも滾々として枯るゝ事なきはなほ彼の頭腦の如く性の如し。到底わが及ぶ所にあらざれど又我等をのぞきては殊に女學校の教諭の如き平凡なるものにて決してその力認めうるべからずといたく失望せるなり。然るに意外にも今度は流石に新手の菊田先生よと思へり。されどこの初雪の文は平凡におだやかに出來たり……。

尙高師入學當時の創作「秋の皇靈祭まで」に……。
他所から歸つて行つて見る家の中の何も彼も高所から見下す様にハツキリ見えた。そして家の内の氣分や人々の愛情の中に没し切れないのが苦しかつた。私の背には東京があつた。私の歸郷を待つてゐた家の中の出來事になぞ對してもさもするさ東京で得た新しい友や師や

本の中の言葉を盾に取つて、責任を免れやうとする卑怯な自分の態度が不快であつた。××さんの事も一人の妹によつて始終思出させられた。妹と私は年が二つしか違はないので何かにつけて、まだ生々しい記憶を呼かへさせられた。妹の歩いてゐる道が痛い程ハツキリ見えた。自分よりも感情の強いそして實際的な才能に於ては自分よりも低い妹が始終私の後を追はふとしてるのも不安であつた。

素知らぬ振をし乍ら後をついて来る人の様に妹は、私の古日記の端や友達からの手紙や鼻をかんだ原稿紙の書損まで拾つて読みたがつた。そのくせ妹は、昔二人がお煙草盆に結ぶて手を繋いで遊んだ時代といくらも違はない様な邪氣ない方面許りしか見せては異れない。私はそれは詮ない事である事を充分承知してゐる。凡そ兄弟位お互によくわかつて居乍ら直接に相觸れるこの出来ないものはない。けれども、私は此の大きくなつた妹が姉にも話せない様な想ひを誰に行つて話しそこでその満足を得てゐるのかしらと思ふと不安で堪らない。この休暇中に時々雑誌の懸賞欄になぞよく名を見かける某といふ若い女が來て妹を呼出しては話してゐるのを私は見た。母が心配して「上やれ」と幾度聲をかけても二人は門の前の橋の上で夕靄が二人の肩に降りかかる迄も面白そうに又心配ありげに話しあひ込んで居た。そうしてゐるのが二人には一番樂しい事の様に見えた。やがて家中に引込んで來た妹は鳥屋に籠つた鶴の様に大人しく沈んだ顔して晩餐の味噌をすり初めるのであつた。あの女は妹の眼にどんなにか不思議な魅力があらう?あの女が私の留守中にどんな風に妹を誘つて行く事であらう?そう思ふと私の妹があの女のために日に日に疲らされて行くのが見える様だ。今の中に姉てふ誇の全部を捨てゝも妹の前に跪づいて、私に相談せずには何もしらない、どこへも行かないといふ誓を立てさせなければ私は安心して上京が出來ない。然しそんな事を思ふ下からすぐ、そんなにして見ても、私の愛情には何の權威も力もない、といふ様な心弱さを感じる。

如何にもお妹さんを理解し同情し獨りで心配して居るさまがみえます。かやうにして遂に粒木さんはお妹さんになくならない人にさせてしました。先日のお妹さんの手紙に、

或時は這ふやうにし或時はゐざる様にして、足かけ四年一日の欠勤もなしに學校通ひしたのもみんな姉の卒業をまつためでございました。どんな辛い事も悲しい事もいやなこともつく一息毎に姉がゐるからい

、姉がゐるからとわれどわが身を押へて居りました。人にはめられれば姉のおかげで感謝し、人にけなさ

れば私は姉がついてゐる。大へんなんでも出来る姉がついてゐるとひそかにゐぱりました。授業の一時間毎に子供達にはすまないけれどこの時間が終れば四十五分だけ姉の卒業に近づくと指を折りくいたしました。今はもう何をまち何をめあてに活きるやら人に誤解されがちな自分を一番理解し同情し愛してくれたのは姉でございました。今こそで姉に死なれた自分は、もう全く世界の底を歩いて居ります。一生あかるい道には出られません。廣い世の中大きな宇宙の間には姉一人の死は何でもない。それは小さい小さいものだから知れませんが、私にとつては丁度太陽に見はなされた様なものでございます。大きな光を失つた私は一生ぶる／＼ふるへて暮さねばなりません。誰一人私をあつためてくれる人もありません。あゝ何故姉は私をもつれて行つてはくれなかつたでせう。これほどまでにお妹さんに粒木さんをたよる強い信頼をおこさせたのでした。それだけにお妹さんの失望は目もあてられない有様でござります。

お妹さんはばかりではありません。御両親に對する孝心の深い事はお妹さんの御手紙の中に「人一倍親孝行な姉は親不孝に終りました。父はそれを哀れがつて親より先にゆくものはきつと地獄に落ちるから、と言つて一生懸命極樂往生助け給へと姉の爲に佛を祈つて居ります。アレ今もかねの音や木魚の音が聞えます……」とあります。又お姉さんに對してもお兄さんに對しても普通以上にある深みをもつた強い感情をもつて愛してゐられたのでございます。従つて他人に對しても、決して常の人ではありますでした。總べてを見透すことの出來た粒木さんは人のどんな欠點でも厚い同情を忘れませんでした。むしろ美點のみを強いて眺めてゐ様となさいました。どんな人に對してもその人にある奥の微妙な點を捕へ

ることを忘れない即ち誰にもある心の奥底を流れてゐる善良な分子を見出すことが出来ました。一寸した級の人達の批評にしても抽象的でしかも穿つたたしかな點をつかむのでした。そしてよくあなたは私を誤解しちやいけませんよ。その人を憎むとか好きだとかいふ様な事をすつかりはなれての話ですよ。と始めの中は前おきするのが常でした。その様な心で「紫式部日記をよみて」といふエッセーに此紫文を假りて自分を言つてゐるのではないかと思はれたのでざいます。現に「第一印象として私は紫女に於て自分に共通な思想性格を大分に發見した……」とあります其の中の一旬に紫女の文は一種寂しい光澤とねばり強いあるものがある、といはれましたが、その粘り強い所といふのはなんとなしに粒木さん自身のある點を語つてゐる様に思はれました。又、作者自身の自己批評に引きつられてそういうふ作者を更にもう一步轉して冷靜に客観的に觀察することを忘れて了ひそうであつたといふあたりまるで自身を他から批評されてゐるそのまゝをかいた様にも思はれました。此外遺稿を讀んでみますとまた時折一寸したお話などなすつた事などをよく考へ味つてみると確にかういふ氣分があつたと察せられるのでございます。

生前これを私に見せて下すつた時にも直覺的に粒木さん自身を批評してゐるのだと思ひました。粒木さんの寂しさはやはり境遇と健康と天稟の非凡とから生じたものであると思ひます。「いつも眼を半眼にしてぢつと座つて痛々しい程鋭い神經を震はしてゐる一人の女性」と言ひ「紫女の感覺は益、纖細な深刻な方面に發達して行つた。だから彼女はその薄暗い世界の中に苦しんでゐるのではない。静かに浸つて或る快さを味ふてゐるのである」いふあたりは自己の心理を物語つてゐる様に思はれます。又紫女に對して、執拗な追究と言ふ言葉を使つて居りますが、これも粒木さん自身に對する適切な評語の様な氣がいたします。そこに不

満が起り苦しい努力に甚しく疲勞を覺えるとして自分を指導して下さる師を求めました。女學校時代の「思ふ事共」の中に菊田先生といふ題で四年になつて始めて師と仰ぐ先生を見出し得て喜んで書いてあります。しかしその中に非常に満足しながら物足りないある物を見出して悲しんで居ります。また先生に接してからまもない頃一度手紙を戴いた時の事が書いてありますが、それは「店の火の氣のない火鉢に頭をもたれて夢の様に例の手紙の事を思つてゐた。そして或る強いものに刺された様に頭をもたげたと「郵便!」なげだした一通見れば見なれぬ手跡……裏は正しく菊田とよど我は頭から足の先までづんと響いたそして全身ふるえて夢のやうに封切つて読み下した二度目には一字一字眺めたあまり強い感覺にうたれると惡感覺になつてしまふ。自分はやはりそれである只終りに「月おぼろにかたぶく折」といふ事がある自分は幾度もくもくりかへした昨夜のうちに着いたものらしい昨夜の月赤くおぼろにかすみゆく夜半私はこれ位印象の強い言葉を見たことがない自分は後幾十通となくその親書に接したがこれ位すきな言葉を見ないこれが一番すきな手紙だそれでも物足らぬといふ事は免れなかつた」とかうあります物足りぬ不満更に苦痛それらは漸く物心ついた幼い時から一生涯を通して粒木さんを苦しめ更に精神的に近い人達に心配させた大きい事柄でございましたそして紫女を評して「怜愛な彼女は内的に外的に自分をよく考へて自分の都合のいゝ道をとつただけである有形的な負擔の重い外的生活には眼をづぶつて自分の生の意氣快樂の全部を空想の世界においた彼女は決して自らは動かないたゞ世間の動くのを觀てゐるのである」……粒木さんの生活は眞にこの通りだつたどうなづかれる節が多いのでございます。尙粒木さんの最後の論文「中條百合子さんの貧しき人々の群を讀みて」を御覽になつても如何に非凡な才能を持つてゐられたかとおわかりでせうと存じますあの批評は當時のあらゆ

る批評中で最も精しく考へたもの、一つであると申しても過言ではないと存じます。先づ以上の様な複雑な到底私共のはかり知ることの出来ない深み種々様々な経験や境遇やそれに伴ふ彼女の鋭敏なそして透徹したしかも女の特性たる緻密さを持つた思想や熱心な感情や強固な意志によつてなんだか薄暗い底の見えないそしてどこか光を持つた人だと存じますそのあらはれは既に幼い時の「我が書齋」といふのや「思ふ事共」の中の「心の底」などにかはいらしく書けて居りますかやうにして一種の寂しさに苦しんでゐられた粒木さんはなくなりました少しだけ前に「私は前とかはつたでせうはれやかになつたでせう」といふ程にかしら光を見こめたらしうございました亡くなれる時にもこれを言ひあらはすまでに練れて居らなかつたかも知れませんが華やかな世俗的の信念ではなく苦しい思索の中から誘み出した強い白光のやうな光を一すちに見つめて居られたと思ふ事に私はせめての慰を得ると同時に嚴肅な崇高な感を禁し得ないのでございます。級の爲にはかういふ人達に似はない責任を強く感して目だゝない様に種々の方面に盡して下さいました。文科三年の誇りであつたこの粒木さんは遂に逝きました。級としても學校としても世の女子の爲にも人知れず自分を苦しめて苦しめぬいて居た粒木さんは去られました。實に殘念と申しませうか惜しいと申しませうか次にくるべき言葉も見出されませんしかし粒木さんはその周圍に實に明確な深刻な印象をあたへてゆかれましたことは私共を見て、去られてもいつまでも私共の心の中に生きて居られる事と信します。

「朋友は眼前にあらざるも猶存在す貧しきもなほ富む弱きもなほ健全なり而して死せりと雖も猶生く余に向つてはシビオは猶生けるが如く而して彼は常に生けるなり如何となれば余が友人の性を愛し而してその性の光は決して消失せざればなり」とシセロは申しました私共もまたシビオと同様な粒木さんを偲びあはせてその冥福を祈るものでございます。

暮れてゆく障子のかけにひつそりとげにひつそりと痛みたまひしか
もゝいろのプリムラのはなにかほよせて見入りたまひ死ぬ十日まへ^{一思}
「クリストも釋迦も孔子も他人です」と死ぬ十日前のたまひしかな
「なんといふひろく淋しい世界でせう」と死ぬ十日まへのたまひしかな
「残つてゐるのは眞實だけです」とまゆよせて死ぬ十日まへのたまひしかな
「梁川の『病間錄』をよみたい」と死ぬ十日まへのたまひしかな
「ともかくにもこの一ヶ月の辛抱です」と死ぬ十日まへのたまひしかな
ふとして話とぎらせピク／＼とまゆよせたまひ死ぬ十日まへ
「うたがひの川とびこえてなせ來ないので」と青きかほみていひ淀みけり
立ちざはに「思つたよりも御元氣なので」といへは大きくなづきしかな
ゆつくりとひくゝはつきりのたまひしみこゑなりかしいまもきこゆれ